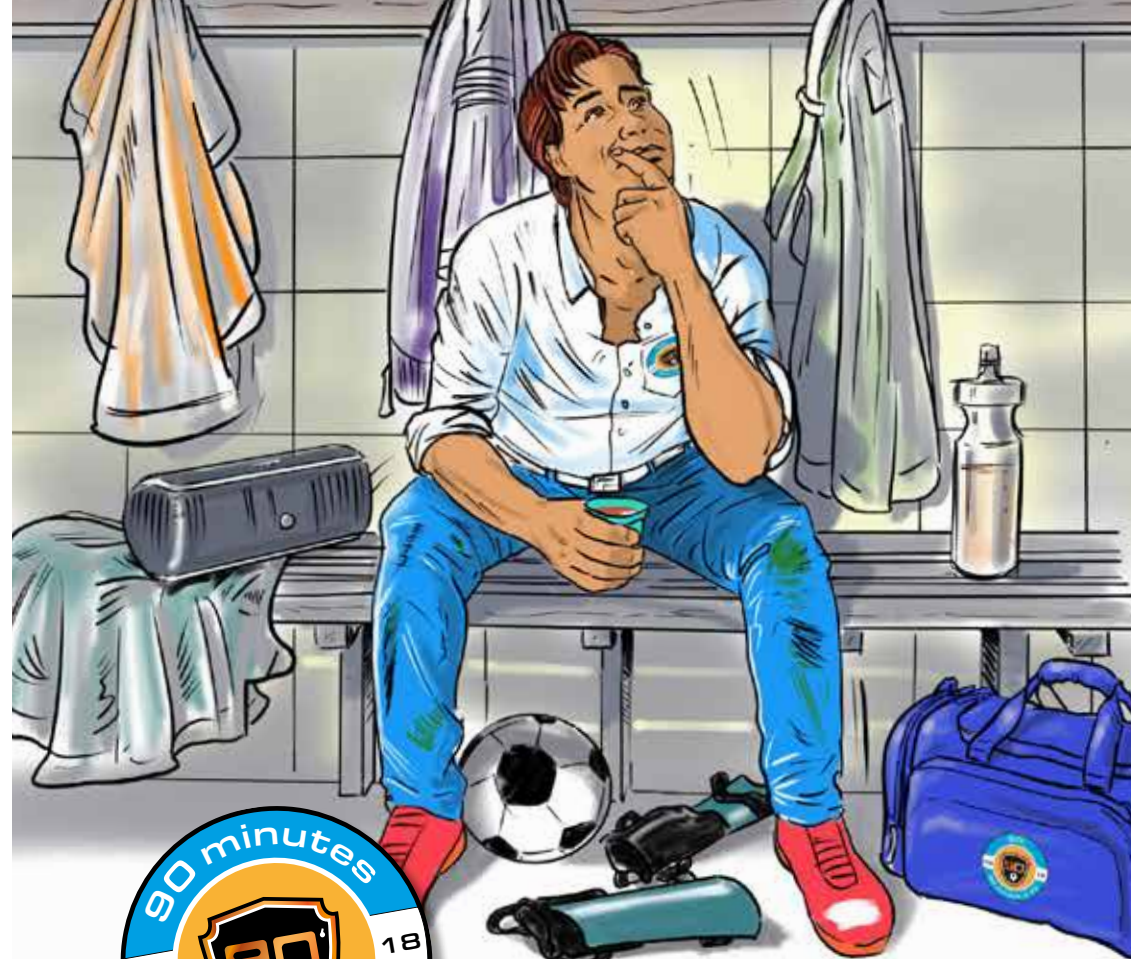




同じ著者により以前発行された作品:
De Bovengever
 国際版

著者がお届けします

ボベンゲバー?それは一体何のことでしょう?耳慣れない言葉ですが、これは従来の起業家とは真逆の意味を持っています。こんな言葉はオランダ語には存在しません。しかし多くの物語やビジネス経験は、国籍を超えた普遍的なものです。好評だったオランダ語の初版に引き続き、国際版がいよいよ登場しました。本書にはビジネスの進め方に関する、15以上の短編が収められています



Your Life in 90Minutes

サッカーの90分でみえるあなたの人生。俊は一流のサッカー選手でした。45歳になった彼は、ロッカールームで自分の人生の前半戦を振り返ります。今はハーフタイムです。サッカー選手として学んだことは、ボールに別れを告げた後の人生にも当てはまるはずだと、俊は気づきました。これらの教えは、人生の後半戦においてもきっと役立つに違いありません。



90minutes.life

出版社: Bovengever出版社

エディ・デ・ハイ

90minutes.life

Your Life in
90
 minutes

サッカーの 90

分でみえるあなたの人生

ディエゴ&エリザに

奥付き:

90Minutes®

エディ・デ・ハイ

概要および本文

協力:

スティーブン・ヴァウデンベルグ
ローラント・ファン・エイウェーク
ダニエル・リム
リンダ・スロウチェス

挿絵およびレイアウト
本文および編集
コンテンツアドバイザー
オンラインマーケティング

無断複写・転載は禁じられています。
バルセロナ 2019年4月初版

出版社: Bovengever出版社

電子書籍でも購入可能

ISBN/EAN: 9789082493429



90minutes.life

はしがき

本書が誕生したのは、FCバルセロナのホームグラウンドであるカンプ・ノウの観客席でのことでした。一緒にいた親しい友人とわたしは、サッカーの試合と普通の人生の間に認められる共通点に気づいたのです。

40代半ばに達したわたしたちの人生の、後半戦がこれから始まるのです。前半戦を振り返って、わたしたちは満足感を覚えました。もちろん、全とうまくいったわけではありません。しかし何が起ころうと、諦めることだけはしませんでした。サッカーの言葉に置き換えて話し合い、あるいは考えることは、他の人も取り入れやすく、新しい気づきを与えてくれます。友人の息子は才能あるサッカー選手ですが、彼もすぐにこの考え方を取り入れました。サッカー用語で考えることによって、彼の現在の状況と目指す目標が明らかになったのです。

この成功に自信をつけたわたしは、次のように自問しました。

「人生は、ひょっとしたら90分のサッカーの試合に似ているのではないか?」と。

そこで、あなたの人生をさらに素晴らしいものにするであろうポイントを、11の要点にまとめました。

本書で、これらの点について「90分」でご説明し

ます。読書をお楽しみいただき、そして興味を持っていただければ願っています。そうすれば、わたしの目的は果たされたと言えるでしょう。

謝辞

本書の執筆に当たっては、次の方々にお世話になりました。厚くお礼を申し上げます
まず、美しい挿絵を描いてくれたスティーブン・ヴァーデンベルグに。また執筆中に考えをまとめる手助けしてくれたローラント・ファン・エイウェークに。

Eddy
2019

はじめに

わたしの名前は俊です。35歳までプロのサッカー選手でした。それは、これまでのわたしの人生で最も重要な時期でした。サッカーと普通の人生の間に見つけられる類似点の多さには、驚くばかりです。わたしはサッカー選手としてプレイする中で、人生についてのいくつかの貴重な教訓を得ました。それをぜひあなたにもお伝えしたいと思っています。90分のサッカーの試合は、90年の人生によく似ています。少なくとも、それだけの長さ、わたしの人生が続くことを願っています。

45歳になったわたしは、最後に所属したチームのロッカールームにいます。ここはわたしにとって非常に慣れ親しんだ場所です。今はハーフタイムです。前半戦を振り返る時間です。わたしは何を学んだのでしょうか?うまくいったことは何か、そして改善すべきことは?こうしたことを正しく分析すれば、サッカーなしの人生の後半戦に向けて、どう準備していけばいいかが分かります。



1. ハーフタイム

やれやれ、こいつは厄介な試合だ。一息ついた方がよさそうでした。弱点の左膝に激突され、古傷がまた痛みだしたのです。手遅れでした。わたしはもっと自信をもって対峙すべきだったのです。もっと集中しなければ。

最初の10分は、周囲に注意して慎重に探りを入れながら、全て順調に進んでいました。それから立て続けに二つの打撃に見舞われたのです。兄弟が事故にあい、それから両親が離婚しました。幸い、学校、友人たち、そしてサッカーのおかげで気を紛らせることができました。

20分後、わたしの人生の枠組みが少しずつ形成され始めました。わたしは、出来るだけ多くのことを学びたいと熱望し、失敗を恐れませんでした。いくつかの大胆な行動をとり、結果はうまくいきました。中でもメディア業界への転職は大成功で、2年以内にCEOに上りつめました。素晴らしいチームと優れたプレイヤーに恵まれ。わたしはゲームを支配し、巧みにパスしたボールはゴールに吸い込まれていきました。あちらこちらで点数を稼ぎました。人生はまるで、パーティのようでした。ゲームはわたしのものだったのです。パートナーとの満足すべき関係、二人の素晴らしい子供達、そして家族や友人たちと、人生を謳歌していました。怖いものなしでした。

ハーフタイムの15分前に、突然雲行きが怪しくなりました。ライバル企業の買収工作がトラブルの始まりでした。我が社は、何度か困難に見舞

われたのです。社員は互いを非難し合うようになり、状況をコントロールできなくなりました。わたしはどうすべきか分からなくなり、ためらってばかりいました。以前にも増して仕事に打ち込み、困難を突破しようとしたのですが、ボールはわたしの足から虚しく跳ね返っていくばかりでした。社員の間で緊張とイライラが高まっていきました。自宅でさえ、状況は変わりませんでした。わたしは古傷の痛む膝をさするしかありませんでした。

これではだめだ。深呼吸して、自分の持つ力を感じる。自分が望むものは自分で決める。どうしたかなんてわかっている。成功するのだ、自分にできることをやるのだ。集中し、時間をかけ、ゲームの配分を決定して、勝負に出るのだ。そう、それならできる。それ以上でもなく、それ以下でもない。

それこそ、わたしの後半戦、人生の後半になるのです。

コーチが「タイム!」と叫びます。

わたしも「行くぞ!」と心で叫びました。

自らの才能に **フォーカス** せよ。 **進め!**





誰も一人きりでは多くを達成できない。

2. チーム

わたしたちはフィールドに戻ってきました。フィールドを見渡すと、チームメイトの姿が見えました。みんないい奴ばかりです。観客の歓声の中で、仲間に肩をポンと叩かれました。頭に手が触れます。「よし、行こう!」それはキャプテンでした。「考えすぎるな。お前のそばにいる。いつでも俺にパスを送ってこい」それは安心と、そして自信を与えてくれる言葉でした。何もかも一人でする必要はないのです。

初めての仕事を思い出します。自分の能力を証明したいと血気にはやるあまり、完全に勇み足をしてしまったのです。失敗するわたしを、同僚たちはほくそ笑んで傍観していました。わたしは不満を抱き、孤独にさいなまれました。もうダメなのか、と。そんなわたしを上司が呼びとめ、言ったのです。「大事なのはお前ではなく、チームとして何を達成できるかだ。チームでお前が果たせる役割は何だ?よく考える。いつでも相談に乗るぞ。」これは貴重な教訓です。誰だって、何もかも一人することはできないのです。そして自分本位な行動は、チームの足を引っ張るだけです。それ以降、わたしは常に周りを見回し、このチームで自分のすべきことが何か、考えるようになりました。

経過を把握し、行動に移れるようにいつでも準備を整え、そして作業を分担する。それこそが、チームで自分のすべきことなのです。点を入れるのは他の仲間に任せ、チームワークを楽しめばいいのです。この点はすでにチームでうまくいっているのですから。全員が何をすべきか理解し、仲間のために頑張る用意ができているから、ボールなしでも、一緒に狩りができるのです。目標

を諦めるような者は、一人もいません。誰もがチームのかけがえのない一員であることを願っており、自分の価値を認めさせるためなら、どんなことでもするでしょう。だからこそチームは優秀な成績を納めてきており、現在、CEOとしてわたしもそのような行動を心がけています。

対戦相手もこうしたことを理解し、同じように振る舞おうとしています。それでも彼らは我々よりほんのわずかに文句が多いのです。チームメイトや審判員に対して不満を抱き、攻撃的な振る舞いで我々を怖気付けようとしします。反応してはなりません。集中し、互いに声をかけあいましょう。そうすれば我々に余裕が生まれ、点数を稼ぐチャンスも生じるのです。

やられた!左膝に正面からタックルされた!「痛っ!まただ!」次の瞬間、キャプテンが横にいました。「大丈夫か...?頑張れるか...奴らを打ち負かしてやる。だけど、それにはお前が必要なんだ。今、お前を失うわけにいかないんだ!」なんと励ましに満ちた、心を奮い立たせてくれる言葉でしょう。仕事でも、何度もそんな経験があります。

真のチーム精神は、大きな違いを生み出すのです!



フェアプレイ。どんな時も！

3. フェアプレイ

医療スタッフがフィールドから出ていきました。相手選手はイエローカードをもらっています。わたしは痛みを我慢します。激しく怒りながらも、彼らに萎縮させられていないことが誇らしくもあります。さっきより気分も回復してきました。重要なのは、試合だけです。

奴らに見せつけてやる！
勝利の決め手になるのは、何が何でも勝ちたいという欲求です。それはサッカーでも仕事でも、変わりません。そのために、どこまでやれるのか？ゲームのルールは決まっていますが、してもいいこと、すべきでないことを決めるのは、審判員の役割です。そこであれこれ試して、どこまで許されるかを決めるのです。肩を押すことは、普通許容されますが、肘をぶつけるのは、明らかにやりすぎです。

強力な相手に対して勝つためには、あらゆる努力を尽くさなければなりません。そうすればあなたは優位に立ち、時にはそれに加えて、あなた

がそこに立っており、相手の為すがままではないことを見せつけられるのです。それこそが成功の秘訣です。

ビジネスにも、守るべき決まりがあります。明文化された規則もあれば、暗黙の掟もあります。公正な方法で情報を獲得する、あるいは約束を守ること。言い訳なしに、事実を正直に述べること。それが、我が社の企業文化です。

もしごまかそうとすれば、やがてはそれが自分に跳ね返ってくるでしょう。いつでもフェアプレイあるのみです！

同じことが、欲求不満や復讐心に基づく肘打ちや無責任なタックルについても言えます。そんなことをする人間は、勝利どころか、自分自身とチームの足を引っ張るだけです。

わたしは限界まで挑戦しますが、それも規則を守ることが大前提です。

怪我は必ず起こる。**努力せよ、**
しかし**無理をするな!**



4. 怪我

それは試合中に起きたのでさえありませんでした。自宅で階段から落ちて、左膝を打ったのです。強烈な痛みと腫れ上がった膝。医者には安静にするように言われました。安静だって?! チームに選ばれたばかりだったのに! わたしはこのチャンスを失いたくなかったので、1週間安静し、痛みも込みなのだと考えることにしたのです。この気合いで頑張ったおかげで、先発メンバーに選ばれました。しかしそれ以来、左膝はわたしの弱点であり続けることになりました。

このことは、若い頃に経験した両親の離婚と兄弟の事故という試練を思い出させます。どちらも、特に自分自身の現在の関係にも関わってくるだけに、いまだにセンシティブな問題なのです。諦めないで、良い結果を目指しましょう。「怪我」に注意を払い、それについて話しましょう。場合によっては距離を置いて休むことも大切です。観客席に向かってボールを蹴る、チームメイトに交代を申し入れる、または監督に相談するのもいいでしょう。よく言われるように、「一歩後退、二歩前進」なのです。

やりとげるべきとはいえ、決して無理をしてはいけません。でないと、深刻な問題が生じるでしょう。わたしの膝の怪我はその限界スレスレの状態でした。

ワールドカップ決勝戦で起きた、頭の負傷とはまったく異なります。あの時はその場で頭を縫われましたが、断固主張して試合終了までプレイを続けました。カップを手にウイニングランに参加中も頭の痛みには悩まされましたが、何も後から問題は起きませんでした。わたしはまた同じことをするでしょう。

怪我はスポーツ、そして人生につきものです。倒れたら、また立ち上がればいいのです。運・不運はあるのです。怪我には特に注意すべきとはいえ、それに取り憑かれてはなりません。実のところ、わたしは自分の膝のことを気にしすぎているのかもしれません。理学療法士には「周囲の筋肉を鍛えて、膝のことは放っておきなさい」と言われています。

自由にプレイし、生きていきましょう!

5. 自分の才能

物心がついた頃から、ボールはいつでもわたしの傍にありました。わたしの一部といっても間違いなかったのです。ドリブル、蹴り上げ、股抜き、どれも容易にこなせました。それに気づいたのは、友達とサッカーをするようになってからでした。試合はほとんどいつも勝ち、よく誉めたたえられました。そして強豪チームでプレイするようになったのです。しかし成長とともに、もっと努力が必要があることに気がきました。いつでも自分がエースというわけにはいかなかったのです。そのことに慣れるまで、少し時間がかかりました。それに加えて、サッカー以外にも興味の対象が現れたのです。仲間たちの間での関心の的は音楽と女の子たちでした。徐々に練習は義務となり、時々練習をサボるようになりました。無意識のうちに、サッカー以外の世界に意識が向いていったのです。自分の外見がひどく気になり、絶えずソーシャルメディアを利用し、携帯電話に触れてばかりいました。プロのサッカー選手になるという夢は少しずつ、意識の外に追いやられていったのです。

そのことをわたしに気づかせてくれたのは、父でした。試合でわたしの精彩を欠いた戦いぶりを見て言ってくれたのです。「お前がしたいことは何だ？」と、父は単刀直入に訊ねてきました。「プロのサッカー選手にまだなりたいのか、それとも趣味でプレイするだけでいいのか？プロに

なりたいなら、真面目に練習すべきじゃないのか。」わたしの人生にとって、それは節目となる瞬間でした。父の言いたいことは、全て理解できました。

わたしの中で、スイッチが入りました。それ以降、練習は学校や友達より優先されるようになりました。自分を律して、サッカーに打ち込みました。才能があるだけでは不十分で、その才能を伸ばせるかどうかカギなのです。集中的なトレーニングの結果、みるみるうちに上達しました。フリーキックは、長時間の厳しい練習を経て初めて、ゴールに入るようになるものです。そのため、ゴールを決めるたびに高揚感に満たされました。その一つひとつの感覚が、猛練習に対するまたとないご褒美だったのです。生まれ持った可能性をフルに開花させられることは、素晴らしい気分にさせてくれます。そしてそれを現在だけでなく、未来にも味わえるのです！

自分自身に**投資せよ。より多く練習**を行い、補習も受けよ。



6. メンタル

サッカーがもたらしてくれたのは楽しさや成功だけではなくありません。わたしにとってそれよりずっと重要なこと、つまり心を鍛えてくれたのです。サッカーを通じて、自分の心の状態を発見しました。自分の心構え、あるいは意思と言い換えることもできます。

父との会話をきっかけに、サッカーに対する考え方が変わりました。目の前の試合に勝つことよりも、プロのサッカー選手になることを重視するようになったのです。この長期目標を達成するには、意識を変える必要があります。絶対にサッカー選手として成功するという強烈な意志。それこそが、わたしの成功の決め手でした。サッカーに没頭し、常に上達を目指して努力を重ねました。その目標に関係ないものに出会っても、気をとられないことが重要でした。ひたすら集中したのです。

試合でも同じことが言えます。勝利を欲し、そのために可能な限りあらゆることをしなければなりません。限界まで努力し、常に前進し、諦めず、ポジティブでいること。この心構えこそが、わたしのサッカー人生を支えてくれました。それだけでなく、膝を怪我してからの長い試練の時間を耐える原動力にもなったのです。ジムで膝の周囲の筋肉を鍛えるたびに、メンタル面が強化されるのが実感できました。誰にも打ち負かされるものか！

この重要な発見は、日々の仕事にも役立っています。例えば仕事があまくいかない時や、提案が採用されなかった時などです。全てを放棄して別の分野に挑戦したいという誘惑は強烈でしたが、踏みとどまって粘り強く努力しました。そのことは自分の人間関係でも変わりません。自分の感覚を信じ、困難な時期を乗り越えたいと願っています。わたしは諦めが悪いのです。

わたしは膝の痛みを無視して巧みなパスをまわし、それがゴールにつながりました。最初に近づいてきたキャプテンが称えてくれました。「ほら、お前がいなきゃダメなんだよ。よくやった！」そう、こんな時のために、メンタルを強化したのです。それがわたしの成功の秘訣なのですから。

脳内に響く声は君の**最良の友**、
それとも**最悪の敵**なのか？





7. 監督

信じられないかもしれませんが、もしわたしが全て自分一人で考えなければならなかったとしたら、サッカー選手として成功することはなかったでしょう。サッカー人生のあらゆる重要な瞬間には、常にわたしを導いてくれる人がいました。それが監督です。わたしを信頼してくれ、わたしが自分の才能を伸ばす手助けをしてくれた人です。そんな存在を、誰もが必要としているのです。もし全て自分でこなそうとすれば、全体図を見失う恐れがあります。短期的な目標に振り回されて、見たいものしか見えなくなるに違いありません。

幸運なこと、これまで出会った監督はみんな素晴らしい人たちでした。一人一人から様々なことを学びました。彼らの言葉を受け入れ、その結果、自分がより優れたサッカー選手に成長するのが実感できたのです。もちろん彼らとの関係は、いい時も悪い時もありません。正直に言えば、初めは彼らにしょっちゅう反発しました。わたしの捕らえ方と違っていただけです。しかし彼らのコメントや提案、質問には考えさせられました。そしてゆっくりと、しかし確実に、彼らに対して心を開くようになり、監督の真価に気づいたのです。今ではこの点について、一点の疑いも持っていない。

仕事の場でも、気づきを与えてくれそうな人を意識して探し求め、彼らと会話するようにしています。その結果、こちらはより賢くなり、また相手もそれを楽しんでいることに気づきました。互いが伸びる手助けをするほど素晴らしいことがあるのでしょうか？あなたの話に耳を傾け、鏡を向けてくれる人がいるというのはいいことです。

若手の頃のわたしはゴールをたくさん決め、ミッドフロントこそ自分に適したポジションだと思い込んでいました。しかし新たに所属したチームの監督は、わたしはプレイメーカーに適していると判断して、後方に移動させたのです。当初、わたしは大いに不満でした。点を入れた時の高揚感を愛していたからです。しかし監督と話し合った結果、彼がどれほどわたしを信頼してくれているかが分かりました。そしてゆっくりと、しかし確実にわたしは与えられた自分の新しい役割を受け入れて、慣れていったのです。

今では、それ以外のポジションは考えられません。これこそ、自分の能力をフルに活かせるポジションだからです。しかし、自分一人では、それに気づくことはなかったでしょう。

8. 12人目の仲間

わたしの記憶に最も深く刻まれている勝利は、ホーム試合で優勝チームに対してあげたものです。先発メンバーから3人欠けたにも関わらず、3対2で劇的な逆転勝利を果たしたのです。前半戦が終わった時点では、0対2で劣勢に立たされていました。ロッカールームに向かう選手の頭上の観客席からは、野次や口笛が降り注ぎました。そして、試合再開直後に反撃ゴールが入ったのです。1対2。その後は、監督による戦術変更の指示が功を奏して、我々は追い風に乗りました。試合の形勢が逆転し、もしかしたら勝利するかもしれないと、観客も期待し始めたのです。試合終了の15分前、2対2! いまや我々は、全スタジアムの声援を受けていました。選手たちはまるで羽根の生えたライオンのように戦いました。あと一点で勝利だ、誰もがそう感じていました。そんな時にわたしは膝をひねってしまったのです。そう、いつも問題になる左膝です...でも、そこで退場するつもりはなかった。こんな素晴らしい大舞台で試合から降りるという選択肢はなかったのです。ファンの声援から力を得たわたしは、痛みをほとんど感じませんでした。ペナルティエリアの端で、どこからともなく左足の前に現れたボールを、わたしは渾身の力を込めて蹴りました。3対2。その瞬間、スタジアムは大きな歓声に包れました。

ゴールを決めることができたのは、12番目の仲間のおかげでした。観客の声援がなかったら、おそらくわたしは選手交代で退場していたはずです。彼らは、わたしが痛みを文字通り限界まで耐

える手助けをしてくれたのです。

12番目の仲間が重要な役割を果たすのは、決してサッカーに限ったことではありません。これはわたしの全人生で度々経験したことです。親しい仲間、家族、そして友人たち。彼らは、あるがままのわたしを愛し、評価してくれる人たちです。彼らはわたしを信頼し、わたしのために思い、どんな時でも助けようとしてくれます。わたしも時には、全て自分でやろうと意固地になって、反発することもあります。そんな時、ついこの12番目の仲間の力を軽視しがちです。でも、良い成績をあげるには、リラックスすることが大事です。そしてそれが可能なのは、あなたを信頼し、助けたいと思ってくれる人がいるからなのです。

忙しい毎日を送っていると、この事実を忘れがちです。

しかしこの12番目の仲間のことをもっと気にかけて、感謝しなければなりません。

彼らがいなければ、わたしはひとりぼっちなのですから。

家族、友人、支えてくれる人たちを大切にせよ。





交代なければ進歩なし!

9. 交代!

あれは鳥肌が立つような瞬間でした。試合終了の5分前、わたしはコーチに名誉ある選手交代を告げられたのです。観客のスタンディング・オベーションに包まれ、わたしは涙が溢れるのをこらえきれませんでした。チームメイトたちも拍手してくれ、ハイタッチが繰り返されました。わたしは感情を抑えきれなくなる前に、急いでロッカールームに向かいました。最後まで自分自身に対して誠実でありたかったからです。そして腰を下ろして、呆然と目の前を見つめました。わたしのサッカー人生は、とうとう終わりを告げたのです。

サッカー人生を通じて、わたしは選手交代を告げられるのが嫌でたまりませんでした。失敗宣告を受けたようでたまらなかったのです。なんで俺が? チームに貢献してない奴が、他にいるじゃないか。しかし自宅に戻り、ソファーにくつろいで頭を冷やして考えると、なぜ監督がその結論に達したか理解できました。たまに理解できなかった場合は、監督に直接説明を求めたものです。そうすることにより、ずっと優秀な選手になったと思います。チーム全体を見つめている監督の視点から物事を眺めることができたからです。

交代はもちろん、試合だけに関わるものではありません。チームの移籍や、ポジション変更というケースも考えられます。変化は常にエネルギーの流れを変え、新しい可能性を作り出します。必ずしも正の方向に流れるとは限りませんが、それはあらかじめ分かるものではありません。重要なのは、交代は変化を引き起こすという事実を

理解しておくことです。それこそが、現状に満足していない者が求めることだからです。

仕事楽しくなくなった時も、同じようにわたしは転職しました。監督の助言に従ってポジションを変えたこともあれば、先発メンバーの一員である実感できなくなった途端、移籍先を探してくれるようにエージェントに依頼したこともあります。

振り返ってみると、おそらくもっと頻繁に選手交代を申し出るべきだったでしょう。そうすれば膝の怪我の後遺症もなく、もう1シーズンプレイできたかもしれません。とはいえ、当時のわたしには、それは失敗の宣告に等しく、才能あるプレイヤーとして、我慢ならなかったのです。

後半戦での重要な教訓は、選手交代を恐れるな、ということです。

交代がなければ変化もないのですから!

10. 運!

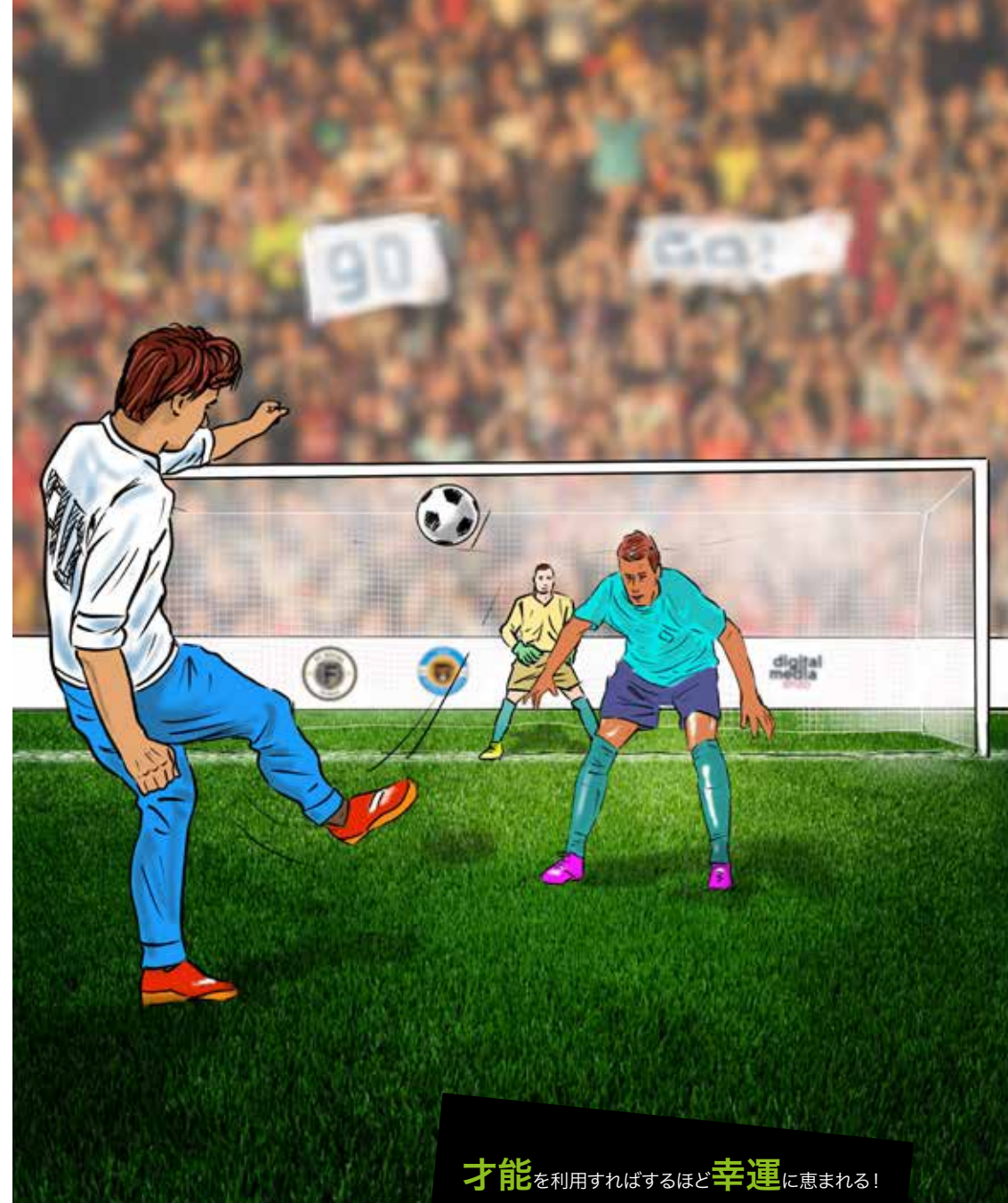
サッカー選手としての人生には、本当に感謝がありません。信じられないほど素晴らしいことを色々経験し、多くのことを学びました。どのレッスンも、後半の人生でもきっと役立ってくれるに違いありません。そう考えると、わたしは何より運に恵まれた人間だったことに気づきます。ボールを蹴る才能に恵まれ、適切な時に適切な人に出会ったおかげで順調にキャリアを築くことができました。自分一人ではここまで成功できなかったに違いがないと思うと、彼らに対する感謝でいっぱいです。そのことはよく理解しています。特に今、ロッカールームで、終わったばかりの一つのキャリアを振り返っている時は。

しかし試合中には、そういったことはまったく頭の中にもありません。あなたは闘争心をみなぎらせ、持てる力を全て打ち込み、うまくいかなかったあらゆることに苛立っています。下手なパス、審判員の判定、弱点の膝。幸運に恵まれたことに気づくのは、ボールがネットめがけてゴールポストの内側に吸い込まれていった時だけです。入った!そして試合は続きます。1-0で試合に勝利し、次の試合に勝ち進み、決勝戦に臨んで、やがて優勝カップを頭上に掲げるのです。でも、もしボールがゴールポストのすぐ外側に落ちていたら...?

幸運に恵まれる時もあれば、うまくいかない時もあります。それが人生であり、それに従うよりほかないのです。わたしにできることは、幸運を受け入れ、また幸運が舞い込むように行動することだけです。そこで重要なのが、自分の直感に従うことです。わたしは第六感が告げるままに行動し、何が現れるかじっと待ちます。膝の二度

目の手術前、悪い予感があったにも関わらず、父以外の全ての人に、なるべく早くカムバックするように説き伏せられてしまいました。そのために受けた医療処置が、うまくいかなかったのです。それは、わたしのサッカー人生が突然終わりを告げるかもしれないという瀬戸際でした。「運が悪かったんだ」と、治療を担当した外科医が後で言いました。しかしわたしは、「自分の直感に従ってさえいれば」と後で後悔したのです。

当時、自分の心こそがわたし自身の強みでした。ネガティブ思考に飲み込まれるようなことは避けていましたが、サッカー選手としては、責任ある行動を心がけていました。チームに戻りたいのは山山でしたが、それも心身ともに健康であることが前提でした。そう決めると、素晴らしいセラピストに出会うことができ、わたしの状態は劇的に改善したのです。本当に幸運でした。幸運を強引に引き寄せられるものかは分かりませんが、でも分かっていることは、心を決め、それを行動に結びつけることによって、運を「優しく招き入れ」られるということです。一つわたしが確信していることは、行動を伴わない幸運などありえないということだからです!



才能を利用すればするほど幸運に恵まれる!



楽しもう! 生きて、学んで、進みましょう。

11. 最後のホイッスル

この物語の終わりに近づいたところで、一つ告白したいことがあります。わたしはサッカーをプレイするのが大好きでしたが、それに関わらず、審判員が時間を確かめ、笛を三回鳴らして試合終了を宣言するのを、よく今か今かと待ちわびていたのです。年齢が上がるにつれ、特に我々が勝っている場合、そんなことがますます頻繁になりました。

時にはまだ試合時間が15分残っているのに、もう心はロッカールームに飛んでいることもありました。まだ試合の6分の1が残っていて、何が起きてもおかしくないような場合、チームメイトたちはわたしに声をかけて注意を促してくれたものです。この率直さは非常に助かりました。なぜなら試合で重要なのは、試合終了時にどうなっているかということに尽きるからです。望みを捨てた試合だけでなく、すでに勝ったつもりでいたもののそうではなかった試合でも。肝心なのは、90分が経過した後の結果なのです。特に終盤では、このことを忘れてはなりません。

仕事でも、最近では区切りが近づくとも集中力を失うことがよくあります。終盤で問題が発生したプロジェクト。あるいは確保したつもりがライバル企業にかすめ取られた契約。「油断するな、俊。試合は90分続くんぞ!」そんな時は、監督の声が頭の中に響きます。

これからわたしは、人生の前半戦で経験した最も美しく、貴重で参考になる記憶を、後半戦でも役立てて生きていくでしょう。今まさにわたしは、後半戦のスタートラインに立っているのです。後半戦でも、素晴らしいことがたくさん起きる予感がします。そして90分をフルに生きるつもりです。自分自身の人生の監督となる準備は整いました。

「さあ、行こう！」

ありがとうございました

次の方々にお礼を申し上げます

シアマ、マーティン & ヘニー、リンダ、インゲ、ブ
ン、カイ、ディームス、ロブ、オムタ、メースト、ロー
ラント、スティーブン、青沼さん、マルタさん、そし
て特に睦夫さんと中島家の皆さん。

アンバサダー & パートナー

CREATIONLINE

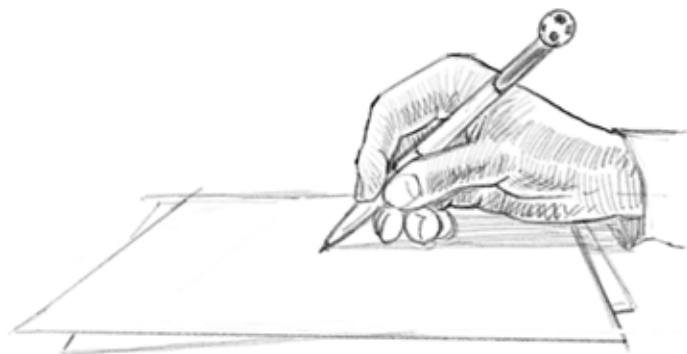


digital
med!a
enzo



Woudenberg *Art*

P·R·O·F
P A R T N E R S



エディ・デ・ハイ

略歴



エディ・デ・ハイは20年以上の経験を持つ起業家です。また投資家、様々な企業の創設者または顧問としても活発に活躍しています。現在彼が注目しているのは、暗号通貨、AI、VR、ビッグデータ、そしてブロックチェーン計画です。彼はZOメディアグループのCEOでもあります。

彼は、世界中のベンチャー企業の中から選別した、次に挙げるような企業にアドバイスしています。Vibby (ニューヨーク)、Goin (バルセロナ、最もイノバティブなフィンテック2018/2019を受賞)、FortKnoxster (ジブラルタル、BitBook (アイルランド)、Yumeキャピタル (東京)、Muster VC (バルセロナ)、DataEnzo (アムステルダム)。

2015年には本書『De Bovengever』を執筆しました。この本にはベンチャー企業との経験に基づいた様々な物語が収められています。

2016年にはその国際版が発表され、好評を博しました。
(2018年4月第4版)

エディ・デ・ハイは90Minutesに関するセミナーも企画しています。90Minutesセミナーでは、本書に登場する、モチベーションを高める章やその他の経験について、特別に取り上げています。詳しい情報やご予約は、下記へご連絡ください: hello@90minutes.life

詳しい情報はこちらからお取り寄せいただけます:
hello@90minutes.life